日本の英語史教育に関する現状と課題
－文献レビューによる考察－

Current Status and Issues in Research on Education of English History in Japan: A Literature Review

新藤　照夫

要旨

本稿では、英語学の一分野である英語史研究の近年の変化の概観を行うとともに、英語史の知見を英語教育に活用する研究の文献を提示し、英語史教育の現状と課題について考察を行う。考察にあたっては、英語史研究、英語史教育の問題点、英語史と英語教育の接点、英語史教育への応用例に焦点を当てた文献を使用し、英語史研究の発展性と問題点改善への可能性について論じている。

キーワード：英語史、英語教育、英語史教育の現状、ケーススタディ、文献レビュー

1．はじめに

英語を習得しようとしている人にとって、英語史の知見は、英語の様々な言語現象の謎を解明してくれるだけでなく、学習への深みをもたらし、知的好奇心も高めてくれるものである。また、英語の内面史に加え、外面史を深く理解することで、「World Englishes」となっている現状もよりよく理解できるのではないだろうか。筆者は大学院の修士課程在籍中に Henry Sweet の *Sweet's Anglo-Saxon Primer* で古英語に触れ、McCrum 他（1987）の *The Story of English* で壮大な英語の歴史を学習する機会を得た[1]。その経験は後に英語の教授者となった際に、大きな利点となって活かされた。そのため、英語を指導する立場の人にとっては、英語の内面史と外面史を理解しておくことは、必要不可欠なものかと思われる。

そのような重要な知見となる英語史の学習は、近年の実学志向の影響や大学カリキュラムの変革の影響を受け、大学の主要必修科目から除外され、存在感を失いつつある感がある。英語の歴史を通時的に辿ることは、実践的な英語力の習得には不要であるかのような印象さえ受ける状況となっている。そのような状況下で、近年は菊池（2015）や寺澤（2016）に見られるように、英語史研究の専門家が「英語史教育」の重要性を説き、変容する現代英語を英語史の観点から捉え、英語教育への接続を試みる動きも出てきている[2]。

また、堀田（2016）では、英語史には学ぶ意義があるとし、その意義について以下のように５点にまとめている。(pp.183-184)

1．現代英語の文法や語彙が学びやすくなる。今まで関連の見えなかった現象につながりが見えてくる。不合理・不規則に見える現象の根拠を知ることができる。

2．英語の過去を知ることで、英語の現在と未来を意識するようになる。これにより、

長崎国際大学人間社会学部国際観光学科　准教授

能動的・戦略的に英語を学ぶ姿勢が身につく。

3．言語とは通時的に変わる（change）ものであり、地理的、社会的、語用的な要因により共時的にも替わる（vary）ものであるということ、つまり「言語の無常と多様性」を認識することにより、相対的で寛容的な言語感が形成され、おおらかに英語を学べる、あるいは教えられるようになる。文法や語法の「正誤」もあくまで相対的な判断に過ぎないと認識できるようになる。

4．英語の歴史は１つの物語であるから、話としておもしろい。

5．「歴史をいくらかでも知らない者は、その人の人間性の重要な側面の1つを欠く者である。歴史が今日の人間を作りあげたのであるから、人間を理解するためにはその過去をいくらかでも知らねばならない」（Bloomfield and Newmark）

このように、堀田（2016）では、英語を学ぶ意義を強調するとともに、英語を学習する際に生じる素朴な疑問に対し、英語史の観点から体系的な説明を行なっている。さらに、堀田は「hellog ～英語史ブログ」を立ち上げ、英語史に関連する情報を発信し続けている。このような活動も英語史を英語学習や英語教育と結びつける重要なコンテンツとなっている。

本稿では、そのような英語史研究の変化をもとに、英語史教育の問題点や英語史の知見を英語教育に活用する研究の文献を提示し、英語史教育の現状と課題について考察を行う。考察にあたっては、英語史研究、英語史教育の問題点、英語史教育の現状、英語史教育への応用例に焦点を当てた文献を使用した。以下では、順を追って議論を進めていきたい。

２．英語史研究の変化

英語史の研究に関して、21世紀に入り、研究内容や対象が変化してきた。ここでは、寺澤が『英語年鑑』で数年に渡って連載を行なってきた、英語史の研究の動向に関連する記述を中心に、英語教育へと繋がっていく英語史研究の変化について概観したい。

まず、21世紀に入り英語史研究が変化していく中で、「英語史の研究2017」では、研究対象の広がりに言及している。従来は標準英語の発達に焦点を当てることが多く、非標準英語変種は英語史研究で対象とされてなかったが、イギリス英語やアメリカ英語以外のオーストラリア英語等の英語変種や方言への関心の高まりが見られることに触れている。また、「英語史の研究2018」では、英語史研究と英語教育の繋がりが当時活発になってきているとして、次のように述べている。

> 「過去志向」の英語史と「現代志向」の英語教育はあまり接点がないと思われたとしても不思議ではないが、実は英語史は現代英語に見られるさまざまな不規則性を解き明かすことで英語学習者の英語に対する興味を喚起し、学習意欲を促進させる効果があり、英語教育にも資するところが多いと思われる。（p.55）

同時に、家入（編）（2016）の『これからの英語教育―英語史研究との対話』の論文集にも言及するとともに、英語史研究に大規模な共時・通時コーパスに基づいた現代英語の史的研究

も盛んになっていることを提示し、英語史研究が英語教育に対し、より実質的な形で貢献できる可能性があると示唆している。

さらに、「英語史の研究2019」では、21世紀の英語史教育について言及し、Mary Hayes and Allison Burkette, eds. *Approaches to Teaching the History of the English Language: Pedagogy in Practice*（Oxford University Press）が、現行の大学カリキュラムの中での英語史教育のモデル授業の形を提示しており、日本における今後の英語史教育に有益な文献であると述べている。

以上のように、英語史研究は「過去志向」から現代英語を研究対象とする「現代志向」へと転換を始め、徐々に英語教育とのつながりを生み出してきており、「英語史教育」という形の研究が見られるようになってきている。

3．日本の英語史教育の問題点

21世紀に入り、現代英語の史的研究が高まりつつある中で、英語史教育の問題点も指摘されている。ここでは、谷（2005）によって示された問題点の一部を取り扱うこととする。谷（2005）は、海外の英語史教育実践の論文について言及し、日本との比較を行うことで、日本における英語史教育の問題と課題について論じている。谷（2005）では、日本の英語史教育の問題点として、「1）教え手の問題、2）受講者の種類と何に重点を置くのか、3）教材の問題、4）学会と教育組織の問題、5）その他の問題」を挙げ、問題点の項目化を図っている。（p.90）以下では、1）から4）に関して要約することとする。

問題1）では、英語学専攻の教員が英語史を担当することが多くあり、教え手が必ずしも英語史を専門として研究しているわけではないとし、英語学が専門ではあるが、英語史を専門分野としない場合には、「教授者が学生に前提とするものと学生の現実の知識には、ギャップがあると考えられる」として、教員が詳細な歴史的な言語事実だけに集中して、学生を英語史から遠ざけないように注意喚起を行っている。（p.90）一方で、英語史を専門とする教員の場合は、専門とする特定の時代に注意を払い過ぎることで、英語史と現代英語の関係をおろそかにし、その関係を具体的に示すことができない場合は、学生の英語史に対する興味を損なわせてしまう可能性があると注意を促している。

次の問題2）では、受講者が教育学部の学生の場合、英文科の学生の場合、短期大学の場合に分け、それぞれの問題点と課題に言及し、学生を英語史に惹きつける重要性についてまとめている。教育学部の場合は、歴史的な側面よりも現代英語との関わりを重視する英語史教育に言及し、現代英語を教える際に、教授者として役立つような形で知識を与える必要性や、言語変異の認識、変種に対する見方、標準語や辞書に対する批判的な見方などを与えることの有用性について説いている。

一方の英文科の学部生に対しては、文学や言語学との関係をどのように保つかという問題に触れ、文法事項や言語理論の取り扱い等さまざまな要因を考慮する必要があるとしている。一方で、「英語史を専攻する者の裾野を広げられる場は英文科であるので、英語史教育の問題を注意深く考える必要がある」と述べ、英文科の学生に対する英語史教育の問題について考えることの必要性について言及している。（p.91）

さらに短期大学の英文科の場合は、初期近代英語テキストの読解の難度を考慮して、外面史に重点を置くとともに、マザーグースを活用し、学生の興味を惹くことが有用としている。マザーグースでは、古い英語とアメリカ英語の歴史に触れられること、現代英語の方言の問題を扱うことができる点が有用であるとしている。

問題3）の教材に関しては、古英語から初期近代英語に重点が置かれた伝統的な洋書の教科書を数点提示するとともに、後期近代英語に加え、英語史と現代英語との関連を重視している教科書として、Graddol et al.(1996)を挙げている。一方、日本語で書かれた教科書等を紹介し、特に現代英語を歴史的な観点から考察している豊田（1991、1993）の一般書の便利さに言及している。

また、紙媒体の教科書に加え、BBC 作成の *The Story of English* のビデオを採り上げ、マルチメディアを活用する英語史教育の有用性に関して言及するとともに、コーパスについても学生のレベルへの十分な考慮をもとに、後期近代英語を対象とする調査に関しては、その利用を勧めている。

問題4）の学会と教育組織の問題では、学会の少なさや、既存の学会が特定の時代の英語史の研究発表を行う機関であることや、英語史の研究には各時代のテキストの読解が必要となり、研究者育成に時間を要すること等の問題点を挙げている。一方で、「若手研究者を育てる encouraging な雰囲気を作ること」の重要性や、英語史を専門とする研究者間の協力により、英語史教育の拡充や研究者の養成を行なっていくことの必要性を説いている。(p.92)

4．英語史と英語教育の接点

上記のような問題点が指摘される中で、英語史の知見を英語教育に結びつけようとする研究も出てきている。ここでは、3点の文献について言及する。

寺澤（2016）では、英語史研究と英語教育の接点について事例を挙げながら論じている。寺澤（2016）は、英語史分野の一つの潮流として、現代英語にみられる史的変化への関心の高まりを挙げており、20世紀初頭からの通時的変化や現在進行している変化も含めて、コーパスによってその変化が明らかにされようとしていると示唆している。その事例として、法助動詞の例と仮定方現在の用法の変化に言及し、現代英語の実情に対応した指導法を提案しながら、英語史を研究することが英語教育に実質的な形で貢献できる可能性を提示した。詳細については次章で後述する。

英語史と英語教育の接点に関わる他の研究として、田辺（2017）では、英語史が英語学習や英語教員養成にどのような役割を果たせるのかを、いくつかの役割を挙げ、論じている。具体的には、英語史の知識をもとにポイントを押さえた歴史的な解説を行うことで、学習者の個性、興味、学習スタイル、英語力のレベルに対応でき、学習効果を上げることができるとしている。また、教員が歴史的な観点から英文法を理解することで、「自信を持って自らの英文法感を持つことが重要」とし、多くの文法項目の中から教えるべき重要なことを知ることができると述べている。(p.97) さらに、「英語に関する FAQ」の回答に英語史の知見を用いて解説し、英語史の知識が有用であることを示唆している。(pp.97-112)

網代（2020）は、近年、英語史教育という立場からの発言が見られるようなってきている点

に言及し、日本における学会や研究会の英語史教育を扱ったシンポジウムを紹介している。具体的には、2005年９月の英語史研究会による「日本における英語史教育－問題と課題」、2013年３月のイギリス国学協会における「英語教育における英語史の効用」、2013年12月の日本中世英語英文学会における「善きヴァイキングとの出逢い：英語史・中世イングランド史における北欧人の役割」、2014年５月の日本英文学会における「グローバル時代の英語教育　英語史からの貢献」、2019年９月の駒場英語史研究会における「これからの英語史教育を考える－英語史をトリビアに終わらせないために」と題したそれぞれのシンポジウムを紹介し、英語史教育への関心度の高まりについて言及している。

また、中学校・高等学校の日本史の授業を話題に挙げ、日本史の授業も過去から年代順に追っていく従来の教え方から、現状の再認識と将来への指針のため、近・現代の知識を深める教え方に見直されつつあることに触れている。同時に、「英語史教育においても、この手法は現代の英語との接点を絶えず考慮しながら過去の英語との史的つながりを認識していくという点で、英語史の意義が確認されるであろう」とまとめている。(p.10)

このように、近年は英語史研究と英語教育を結びつけて考える英語史教育に関する研究が見られるようになってきており、英語史の知見の有用性が再認識されつつあることがわかる。次章では英語史の観点を教育に取り入れる手法に関する研究について触れたい。

５．英語史教育への応用例

この章では、英語史教育の具体的な応用例を紹介したい。特に、英語史教育の高まりを見せてきた2015年以降の文献を取り扱うこととする。コーパスに基づいた現代英語の史的研究の２点と、高等学校での主体的な学びを提供する実践報告の１点に加え、知的好奇心を刺激する実践例の２点を採り上げたい。

菊地（2015）は、譲歩を表す前置詞である、despite、in spite of、notwithstanding の使用に関して、通時的コーパスと共時的コーパスを使用することで、現代英語の使用状況を分析している。さらに、その結果を日本人学習者の作文の傾向と比較することで、譲歩の前置詞の指導に生かすことを提案している。コーパス分析の結果によると、19世紀には優勢であったnotwithstanding は1900年以降は、使用頻度が低下し、in spite of も1910年以降使用頻度を落としている。一方で、despite は1950年以降は、使用頻度が上昇し、優勢となっている。これらの結果と日本人学習者の作文傾向を比較した上で、despite の指導法に関する提言を行うとともに、入試問題の見直しについても提言を加えている。

菊地（2015）の研究は、コーパスを活用し、現代英語の使用状況を英語史の視点から分析することで、英語教育の指導法の改善に貢献できることを示唆しており、今後の研究の広がりの可能性を感じるものである。同様に、寺澤（2016）は、現代英語の史的研究が英語教育に貢献できる可能性を秘めているとして、コーパスを用いて法助動詞と仮定法現在に関するケーススタディを行なっている。

法助動詞に関しては、許可の助動詞である May I ask ～？と Can I ask ～？の使用頻度をコーパスを用いて分析し、Can I ask ～？は1960年代以降頻度が増していることを提示し、さらに詳細な分析によって、口語の場合の Can I ask ～？の優勢さを示しており、「発信型の英

語許可表現としてはcanを教えることが望ましいのではないだろうか」と提言している。(p.14)
また、義務を表す助動詞に関しては、現代英語ではmustの使用頻度が大きく低下しており、特に発信型の義務表現としては、「今後はshould、have to、need toの方を中心に教えていく方が効果的であると考える」としている。(p.15)

一方の仮定法現在に関するケーススタディでは、demand that S beとdemand that S should beの使用頻度を比較し、一般的に仮定法現在がアメリカ語法で、shouldを用いるのがイギリス語法とされているが、イギリス英語でも1920年代以降は仮定法現在の使用が増加していることを提示している。この現象について寺澤（2016）では、「Americanizationの一例とも言えるかもしれない」と述べ、学校文法ではイギリス英語でも有力になりつつある仮定法現在をまずは教えるべきであると提言している。(p.18)

ここまで、コーパスに基づいた現代英語の史的研究に関する2点の文献を見てきたが、新たな教育実践について触れておきたい。森田（2021）は、高等学校の語彙指導に英語史の知見を活用するとともに、OED Text Visualizerを用いた、主体的な学習の実践報告を行なっている。語源や、借用の知識を一方的に教授するのではなく、OED Text Visualizerによって語彙の歴史が見える化されたものを活用し、生徒の主体的な学習を促すことで、語彙史の学びをより深くするとともに、知的好奇心を刺激する工夫が見られ、英語の語彙指導のアクティブ・ラーニングの一つの実践例として示唆に富んでいる。

他の英語史の英語教育への応用例として2点の文献を挙げておきたい。上利（2017）では、英語のスペリングと発音の指導に際し、英語史と英語音声学を融合させたアプローチを用いることで、スペリングと発音が乖離している理由を解明するとともに、学習者への探究心を掻き立てる動機づけになるとしている。また、藤城（2020）では、オンライン授業における英作文指導の際に、文法的誤用として顕著であった主語の誤用における日本語の干渉の可能性を検討し、主語の使用の適切性に関して、英語の通時的な発展過程の視点を用いて、学習者に英語固有の仕組みに関心を向けさせることを有効な手段として提案している。そうすることで、文法ルールとその例外を機械的に暗記させるのではなく、「言語の有機的な発展の結果としての英文法理解に導くことができる」と述べている。(p.103)

6．考察

近年の先行研究を概観することで、英語史研究の新たな動向として、英語史研究を英語教育に応用していく研究が高まってきたことに触れてきた。また、英語史教育にはまだ問題点がありながらも、英語史の視点を「過去志向」から「現代志向」へと現代英語に研究対象を移行することで、英語教育への貢献の可能性があることが示された。

その応用例として、大規模な通時的・共時的コーパスを用いた現代英語の実質的な語法の提示による教育改善に加え、OED Text Visualizerを用いた語彙指導に関するアクティ・ラーニング実践、英語史の知見を活用したスペリングと発音に関する指導、通時的変化の過程を導入した文法指導などを取り扱った。いずれも英語史研究が英語教育に実質的な形で貢献できる可能性を提示していると思われるが、今後はコーパスやOED Text Visualizerのようなテクノロジーを活用した英語史教育がさらに発展していくものと考える。

特にコーパスを利用した現代英語の変容に関しては、口語レベル、文語レベルなど、レベルに応じた現実的な指導に有用であると考えられるため、この手法に多くの研究者が関心を持ち、研究を進めていくことで、有用で実質的な語法や文法指導の体系化がより早く実現できるのではないだろうか。その結果、そういう指導を受けた学習者に対し、言語使用に対する不安感を取り除くとともに、説得力を与えることができ、学習者は自信を持って各語法や文法を使用できるのではないかと考える。

もう一方のテクノロジーであるOED Text Visualizerを用いた語彙教育への応用は大きな発展性を秘めている。語彙の初出年代や頻度がわかるだけでなく、機能語と内容語という観点から見るのも興味深い。また、語彙の初出年代を見ることで、英語の外面史につながる当時の社会背景が垣間見られ、世界史という観点を採り入れて説明を加えることができ、英語史が世界の歴史の一部であることを身近に感じられるとともに、より深い学びにつながる可能性がある。OED Text Visualizerを活用した研究や教育への応用例が今後さらに増加し、歴史の深みを感じる語彙教育へとつながっていくことを期待したい。

将来的には、これらのテクノロジーを駆使した英語史教育の手法を英語史が専門領域ではない英語史担当教員に共有することで、谷（2005）によって挙げられた問題の1）は改善される可能性があるかもしれない。英語史が専門分野ではない英語史教授者に対し、英語史の専門家が行った研究を積極的に共有することで、ある程度均質な英語史の授業が展開できるのではないだろうか。ひいては、学生の英語史への興味を高めることにつながる可能性もある。

問題2）に関しては、学部の特性に応じて、学生に教授する研究成果を選択することで、改善される可能性はある。例えば、教育学部の学生に対しては、コーパスによる語法分析による教育は有用で、その指導に重点をおくことで、教員となった際の指導を支える自信となる。一方、英文科では、OED Text Visualizerを活用した語源学や語彙教育の手法を共有することで、その指導を足掛かりに、学生の英語史への興味喚起へと促していくことができる可能性がある。例えば、TOEICなどの検定の学習に注力している学習者には、語彙強化の一端としてOED Text Visualizerを活用することで、語彙が視覚化でき、長期記憶に留めることにつながる可能性があり、有益かと思われる。

谷（2005）による英語史教育の問題4）でも触れたように、研究者の増加と研究者間のネットワークの拡大は重要な課題である。上利（2017）や藤崎（2020）のように、英語教育に英語史を応用する工夫が見られるが、研究者が増加し、ネットワークが拡大すれば、より活発な議論が展開され、英語史教育の魅力とともに、有用で深みのある英語教育が実践されると思われる。英語史研究者の育成にあたっては時間を要するため、研究者育成に対しても「過去志向」から「現代志向」への視点の転換を行い、まずは現代英語の変容を研究する研究者を育成し、その後、各時代のテキストを研究する方向へと繋いでいくことも視野に入れる必要があると考える。その結果、近い将来、研究者の増加とともに研究者間のネットワークの拡大によって、研究情報の共有化が進み、英語史教育の充実化を図ることができるのではないだろうか。そのような英語史教育を受けた学習者の英語力の定着や向上に、英語史研究が貢献できるようになることを期待したい。

7．おわりに

本稿では、近年の英語史教育に関連する文献を調査し、英語史研究が英語教育と結びつき、英語史教育として新たな展開が広がっていることを確認した。現状としてはいくつかの問題点はあるものの、各研究者が英語史の新たな教育手法について研鑽を積んでいることがわかった。特にコーパスやOED Text Visualizerを活用した研究には発展性があり、研究の広がりの可能性が感じられる。

以前の英語史研究は、過去の変化が大きな時代を取り扱い、「過去志向」になることで、現代と切り離され、場合によっては静的だと見なされる可能性があった。しかしながら、先行研究によって、現代英語の変容に対して、コーパスを活用し、史的言語学の観点から動的に捉えることで、英語史研究の成果が英語教育に有機的に連関し、英語の学習に大きな意義を見出す可能性があることが示唆された。また、OED Text Visualizerを活用し、歴史を視覚化し、主体的な学びを提供することは、今後の英語史教育に新たな視野をもたらす可能性を秘めている。

英語の教師になる場合には、英語史の知識は不可欠なものだと考える。壮大な物語としての英語史に関心を抱いてもらい、知識を蓄えて、自信を持って英語教育に携わる人が今後さらに増えていくことを期待している。そのためには教授する側の創意工夫が必要である。個人での取り組みを実践することは重要であるが、集団として課題に取り組むことは今後一層重要となるであろう。英語史教育の研究に携わる研究会の活動や研究者間のネットワークが強化され、研究成果や教育手法を共有することで、より実践的な英語史教育が展開され、結果として英語史に関心を抱く学生が増える可能性がある。英語史教育の更なる発展に期待したい。

【注】

1　東浦義雄による註が付いたもので日本語題名は『古代英語文法入門』、千城出版

2　菊地（2015）、寺澤（2016）については、第5章で紹介する

【引用文献】

Sweet, Henry（1990）東浦義雄 註『古代英語文法入門』Sweet's Anglo-Saxon Primer　千城出版

McCrum, Robert, William Cran & Robert MacNeil (1987) The Story of English, New York, Penguin Books

堀田（2016）『英語の「なぜ?」に答える　はじめての英語史』研究社

「hellog～英語史ブログ」（http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/）2022年12月29日閲覧

寺澤盾（2016）「変容する現代英語－英語史と英語教育の接点」関東英文学研究第8号，11-18

寺澤盾「英語史の研究2017，2018，2019」『英語年鑑2017，2018，2019』研究社

谷明信（2005）「わが国での英語史教育の問題と課題」『兵庫教育大学研究紀要』第27巻，87-94

Mary Hayes and Allison Burkette, eds. (2017) Approaches to Teaching the History of the English Language: Pedagogy in Practice. Oxford University Press

Graddol, David, Dick Leith & Joan Swann (1996) English History, Diversity and Change. Routledge

家入葉子編（2016）『これからの英語教育―英語史研究との対話Can Knowing the History of English Help in the Teaching of English?』大阪洋書

豊田昌倫（1991）「英語表現をみがく〈動詞編〉」講談社現代新書

豊田昌倫（1993）「英語表現をみがく〈名詞編〉」講談社現代新書

田辺春美（2017）「英語史は役に立つか？：英語教育における英語史の貢献」『成蹊英語英文学研究』第21号，95-113

網代敦（2020）「近年の英語史をめぐる教育とその研究の一端について」『大東文化大学英米文学論叢』第51巻，1-21

菊地翔太（2015）「現代英語における譲歩を表す前置詞：英語史研究の英語教育への貢献」『専修人文論集』

第97巻，375-391
森田真登（2021）「高等学校英語教育における英語史の活用：OED Text Visualizerを用いて教科書本文の単語の理解を深める」『Colloquia』第42巻，125-142
OED Text Visualixer（https://oed-text-visualizer.oxfordlanguages.com）2022年12月29日閲覧
上利学（2017）「英語教育に向けて：音声学と英語史の役割」『広島文教グローバル』第１号，1-10
藤城考輔「大学生英語学習者の主語誤用に見られる母語干渉：オンライン英作文教育の課題と英語史からの提言」『岡山理科大学紀要．B，人文・社会科学』第56号，95-104